

気管・気管支、肺胞などに生じる悪性腫瘍

呼吸によって吸い込まれた空気は、気管・気管支を通り、肺の奥にある肺胞という場所に到達し、空気中の酸素と血液中の二酸化炭素が交換されます。肺がんは、この気管・気管支や肺胞の一部の細胞から発生する悪性腫瘍です。

肺がんの一般的な症状は、治りにくい咳、血痰、呼吸困難、発熱、胸痛などですが、どれも肺がん特有の症状ではありません。また、進行の程度にかかわらず無症状ということもあります。

喫煙は肺がんの最大の危険因子です

肺がんは喫煙との関連が深いがんです。喫煙者が肺がんになる危険性は、非喫煙者の10～20倍程度高いとされています。また、喫煙開始年齢が若いほど、喫煙量が多いほど、肺がん発生の危険性が高くなります(1日の喫煙本数×喫煙した年数、が600以上)。しかし、喫煙者が禁煙すると、喫煙を続けた場合に比べ、肺がんの危険性は低下します。

なお、受動喫煙、つまり喫煙者の周囲の人が、無関係にタバコの煙にさらされ吸入した場合でも、危険性は高くなります。

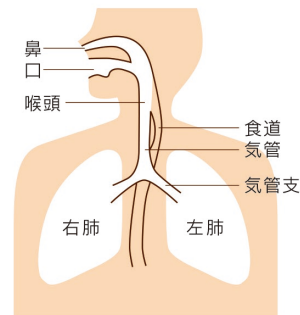
肺がんの分類は、大きく2つ

がんの性質や治療方法、治療効果が異なるため、肺がんは

大きく2つに分かれます。

その一つ、非小細胞肺がんは肺がんの約80～85%を占め、さらに腺がん、扁平上皮がん、大細胞がんなどに分類されます。

もう一つの小細胞肺がん(小細胞がん)は肺がんの約15～20%を占めます。これは増殖が速く、転移しやすいがんですが、非小細胞がんと比べて抗がん剤の効果が高いため、抗がん剤治療が中心となります。



治療方法は手術療法、放射線治療、 抗がん剤治療を組み合わせで行います

治療は、肺がんの分類(非小細胞肺がん、小細胞肺がん)と進み具合に基づいて、また、患者さんの全身状態、年齢、心臓・肺機能などを考慮しながら、手術療法、放射線治療、抗がん剤治療を組み合わせで行います。

最近では「分子標的治療薬」や「免疫チェックポイント阻害薬」という、新しい作用機序の抗がん剤が多く使われるようになりました。